

雑詠日記

海蝶息音

卷の六

二〇二〇年

谷川
修



二〇二〇年はわたしにとって試練の年であった。具体的にその病気の症状を語るのはい趣味とは思えないけれども、今年の雑詠がなぜこのように瘦せ我慢・強がり・泣き言・祈り…などになっているのか、事情がある程度分らないと理解がむずかしいだろうから、ことばがぎとして文中に少しだけ状況を書き添えている。今年の雑詠集は身心のか弱い男の苦しさや不安を露呈したものである。

もうしばらく生きられるとして、今年の試練がわたしを少しはましな人間にするだろうか。そうでなければいけないと思う。

付記

今年の雑詠日記が完結できたのは、長く身心の苦境に陥った期間、妻の献身的な介護があったからである。この間、わたしの身心がなんとか維持できたのはかかりつけ医M先生の適切な治療の、また、精神の衰弱がくい止められたのは畏友I君の訪問と滋味ある談話のおかげある。入院して手術を受けた二つの病院で医師・看護師はじめ多くの人たちから受けた手厚い医療と介護やさまざまな介助も忘れることはないだろう。そして、家族や親戚などの心配りや励ましも力があつた。改めて、一人の人間の生は多数の人間の網の目によって支えられていることを身に沁みて知った。記して感謝を表わしたい。

一月一日

やまとばら五輪初日の幸浴す

(孫とわたしも)

一月七日

金山寺みそを添えた半丁の豆腐とチーズで季節を誤る七草粥を食べた。

床の間に祖父の肖像、命日は寒の始まり、思索難波

一月八日

長兄のたった八日のその生は名だけを残し肖像もなし

その名がわたしのペンネーム。今日は命日。

一月十二日

能古志賀を見る百道浜ももぢどんど焼き

一月十五日

鴨遊ぶ汽水を上る寒の潮、岸辺の家にそつと蠟梅

一月十六日

水仙が書齋清楚に守り開花

(七日の不在)

一月二十一日

園丁が栗の切り株で転倒し、歌口ずさみ果樹いつくしむ

一月二十七日

貧血で腰が砕けた園丁は天を敬う慎み学ぶ

(未明三時トイレに立つて)

風うなる時化や春待つ松に雨

二月一日

「月を仰ぐ種族の独り言」

太陽が赤いと言う人はきつと早起きなのだ

今朝、湾の奥の谷筋の向こうが朝焼け

昨日、ささやかな短い文ができて心持ちが和んだ

今日は、何かできるだろうか

こんななんでもない散文を分かち書きして

月が白いと言う人は日の下でも空を仰ぐ種族

昼下がり、汽水の波が用水路を上っていく

脚を浸している白鷺の見上げる横顔の月が

海に頼んで潮のいくらかを送ってくれたのだ

みんなが修行をつんで円満を達成すれば

汽水の波はやさしい春の水に出会うだろう

二月三日

同じ歳の人がどういふ日記をつけているかに関心をもって、作家で詩人のメイ・サートンという人の『14歳15の日記』を読んでいたら、その友人の時間の本質を言い当てた言葉に出会った。

「蓄えることのできない唯一の富」

蓄えることのできない唯一の富が

わたしの身心の全体に吸収されるとき

その全体である魂は共鳴して

時とともに時を味わい

身心はよく改造されているか

今日は昨日よりもよいものになるか

二月九日

もう春に？ 雲間の月に問いかける

四日家を離れたら生活のリズムが乱れた。今日の月齢は十五のようだ。

二月十日

朝食のとき、NHKのドラマがめずらしく夕方を満月でない月で表現したと思つたら、その月は縦に切つたような右半分で背景は暗い空。製作者

たちは観念だけを貼りあわせて思考しているのかしら。現実の情景を味わうことがないかのよう。

春に会うまた白梅を白に活け木と人共に命讃嘆

二月一六日

天と地と海を見渡す岸に立ちこの生を問ういかに在るべき？

手術を前にかせなど引かぬように、人中に出ないようにして日を送っている。こういう場合にも、人には何か意図する思いが湧く。入院中に聴こうと、志ん生と円生の落語とベートーヴェンの音楽を電子媒体に記録。

二月二十三日

浅き春、すなどり人のあと追う鵜

陰暦の一月晦日さし寄せる潮に濁失せ残る水鳥

去年十月毎年続けていたPSA検査の数値が上昇。MRI検査、生体組織検査を経て十二月に前立腺癌と判定された。老夫婦でいなか暮らしをしているが、娘のいる都会の病院で内視鏡支援ロボット「ダヴィンチ」で前立腺全摘手術を受けることにしたら、手

術は二月の下旬になった。初めての入院である。手術後の経過は順調だったが、二日絶食のあと病院食を食べ過ぎて胃腸を痛めた。そして、尿管を除去したら後遺症のひとつが判明。退院した十日後、目はくぼみ、手の甲はしわだらけの皮膚の下に血管と骨と筋だけ。ふりかえってみると、この日以来、手術の後遺症によるストレスが自律神経をしないで失調させ、死の恐怖に直面したわけでもないのに、わたしは深刻な身心の不調に陥り、自分のひ弱さを痛感することになった。あれこれ考えて睡眠薬などではよく眠れず、疑似的な胃・十二指腸炎の症状が生じ、体重減少の危惧から栄養補助剤を摂りすぎで糖尿病を発症。関連したそれらの副次的症状が困難をさらに深めていった。

三月五日

大半をリクライニングで日を過ごし復調を期す Be patient.

遅そ脚で河口を歩き水鳥と言葉を交わし衰微養う

三月六日

「訓練をどうぞ地道に」、先生のこの忠告を日々に復唱

受容し信奉すべき人生訓を授かった。外界に働きかけて生きる者の法。

三月七日

仕切り直し故郷への道こぼし咲く

前庭に虎吊るす家春の道

天運が微動し帰還終の家高野つつじが咲いて出迎え

三月十二日

連れ合いの献身に依り生きている人の網目に生かされている

三月十三日

老病を見舞いたわる尉ジョウビタキ

(尉鶴。尉は白い灰、能で翁)

天井に映りゆらめく春陽射し

石棺の出土した丘佇立して水平線の果て凝視する

三月十六日

享けついだ人の遺伝子信頼し血に驚くな小心者よ

授かった寿命の始終うろたえず見とどけていく覚悟養え

三月十八日

昨日も九憂一喜今日もまたこの生を享け一日つくる

(一喜があれば)

三月春分

感動し目を潤ませて映画観る天地のうちに在る人描く

張芸謀の「初恋のきた道」を再観。今の境遇に天地人がいとおしい。

三月二十二日

池干され今は金魚も濡れ縁の小鉢を終の棲み処とはする

入浴が極楽と知る歳老いて見るべきものはなお有りうべし

三月二十五日

誕生日余命の延びたこと祝い身に相応の生活模索

三月二十八日

雨上がり手植えの桜二三輪咲き出す春にまた巡り遇う

三月三十一日

花々の開く生気をもらおうと氣息整え花に近づく

四月二日

勉強して桜並木の下通る

(白楽天の「東城尋春」を復唱し学ぶ)

運転免許更新のための高齢者講習を受ける前に慣れるために運転再開。

尿パッドして赤星を討つ老夫

(連れ合いの助けで。梨は収穫できるか)

四月三日

鶯の声聞いて観る我が郷土この網膜に永くとどまれ

四月四日

リングまだ花芽はわずかだとしても兆しに懸けるリハビリテーション

四月七日

頬白よ桜の花と陽を浴びよ

浄光で弥生望月我れ癒せ

畏友から心ぬくもる電話あり大満月のしくみ問われる

(まさに慰問)

四月十日

苦戦するリハビリテーション弱音吐く胆の小さな男がここに

四月十三日

膚寒や花に嵐の始終あり

四月十四日

陽の下のわずかな作務で保つ生

四月十六日

老夫婦若葉萌え出る丘に立つめずらしいこと今日は記念日

四月十八日

手の甲に見逃してきた老いを見てようやく悟る今の境遇

姫林檎の花見て和む時を得る

四月二十一日

ストレスが原因で胃腸の調子がまたおかしいので、気分転換と運動を兼ねて丘の公園へ。

体力の衰え感じ丘あがる若葉に触れて回復祈る

たんぽぽの綿毛を吹いて行く方見る

四月二十五日

鳶の影踏んで海山見て歩む

ヤマトバラ春の陽光もらい受け命に化して光明灯す

四月二十七日

春熟れる一日一日数えて暮らす

四月二十九日

娘から励ましもらい朝陽浴び日日生きる力授かる

五月三日

コロナ禍で疲弊する世に孫たちの心なごます時すこす術 (画像が来る)

ヤマトバラ数えて妻は花柄を摘んでいたわる千を超えても

五月六日

対岸に渡り海辺を散策し気分転換、湧く気力待つ (彼岸から己を見る)

彼岸には小さな小さな鯉のぼり

五月九日

九憂に惑わぬままに日々生きる心になれば悟りへ一歩

悪戦苦闘、叶わぬまでもせめてその願いを抱いて。

五月暗天、空の雲には整序あり

五月十二日

ホタルブクロつつじにも陽を分けてやれ

五月十六日

石臼に布袋二人を招聘す

五月十七日

ありがたや今日は畏友が来訪しわたしの心癒してくれた

五月十八日

濡れ縁の金魚三尾が襲われる主の保護を得ることできず

(嗚呼)

五月二十一日

満面の笑みでバラ園見せる人、なるほどここに幸せがある

五月二十四日

我が海に引かれて水面滑る人、人は見つけるこんな歓び

甲イカの墨跡のある対岸の咲く花々のなかにコスモス

五月二十六日

朝刊「折々のことば」。今日は、オーストリアのV・E・フランクルという精神科医の言葉を紹介していた。昨日は、カントの「人の理性が関心をもつ三つの問い」だったが、今日の言葉を句に表わせば、

人間は世界の中で環境と相互作用し生きる存在

人間は思い通りに生きられぬ

五月二十七日

海霞めプロペラ回す初夏の風

(千疊敷山上から混然とした海と空を望む)

五月三十日

日々数え十と三週その日々が是となるように今日を重ねる

六月三日

木陰下友の言葉に癒し得る

六月八日

日に三度挨拶交わす我が海よ海の度量を分けてください

人生の諸相を歌う歌々にしみじみ生のいと惜しさ知る

六月十五日

わたしの桃よ治癒しておくれこの胃弱

(ストレスの半分は体重減少)

六月十八日

ウイルス禍今のヒトの世あばき出す、人は生き方改められるか

六月二十二日

黄金虫病気の者に仇なすな

無花果を一つ収穫、息を吸う

クチナシが咲いたと妻に教えられ白い花見る庭の片隅

六月二十七日

ひと時を友と語らい、夕べには、蓮の蕾に気づく喜び

六月二十八日

青鷺が独り高みで夕涼み 此岸と彼岸視野に収めて

七月四日

手入れもできなかった蓮の花が一輪咲いたので、日ごろの心遣いに報いたいと友人夫妻を招き、妻の点てた抹茶を献じてしばらく話した。晩に、電話があつて、初案だが次の俳句ができた、コメントをほしい、と。

睡蓮咲く老いたる四人八つの眼

胃のもたれに苦しみながらぼんやり考えていたら、コメントの代わりに讃となる句ができたので、折り返しの電話で伝えた。

老いた眼は蓮華一つにあこがれる

友人は、初案の先頭の五文字を「蓮華の雨」へ変えようと思つた。それから、わたしの句に対して、「老いた眼は」は場景をあいまいにしか表現せず抽象的だ、という批評が返つてきた。言われてみれば、わたしの句はたいいてい、抽象に傾き自己の情緒しか表わさない。また、短歌も俳句も両方やろうとするのはいいことではない、と忠告を受けた。

ともかく、ささやかな出来事が生じて、貴重な一日を得た。

七月十三日

神経を律しえぬまま井戸端の鬼百合を見るくぼむ眼で

七月十九日

天仰ぎ人をも容れる不可思議な世界の法を敬って在れ

七月二十六日

天仰ぎわたしを生かす不可思議の世界の法にただ帰命せよ

七月二十七日

赤手蟹の見舞うれしや、梅雨明けず

七月三十日

蓮の花がもう一つ出てきた。先日、手術を受けた病院へ出かけ検診を受け、胃腸を診てもらい神経症についても相談して、その都市に一週間ほど滞在した。帰宅後、電話をかけてきた友人に、COVID-19の感染者が多い市に行ったから、用心のためしばらく会わない方がよいだろうと伝え、たばかり。せつかく咲いた花を見ながら話することが叶わない。そこで、はがきにその一茎の蓮花の写真を印刷し、駄句を添えて送った。

もう一輪世界を開示蓮の花

夕方

蓮の花享けた御礼山々と海に言上天を仰いで

(梅雨が明けた)

八月五日

白いてふてふ炎天を関知せず己の生を生きている

八月十四日

灼熱に汗を光らせ青蛙

(「人新生」の残暑)

八月二十五日

法師蟬季節はすでに秋と告げ日々を数える痴愚戒める

八月二十七日

なるようになると娘に諭される天の理法がこの身貫く

九月二日

天上に地上に大風、我卑小

(良寛禪師の強靱さがほしい)

九月十六日

小学生残し隣家の母急死、天の理法に老夫とまどう (この老人ではなく)

九月十九日

曼殊沙華まことに今日を好い日とす

(自律神経は失調していても)

蜘蛛の糸と回る落ち葉が光る午後

*

二月に受けた手術の後遺症がひどく、改善のための手術を受けることにした。九月二十四日に入院し二十八日に手術。今度の手術も無事に終わったが、予期せぬ皮下出血が大きな腫れをもたらした。また頭をもたげた不安からまだ入院していたが、一週間延ばされただけで、十月十三日に退院。入院していた二十日間、平静でない状態で日を過ごし、看護師に多大な迷惑をかけた。手術後も一月半有余の辛苦が待つ。

十月一日

病棟で名月仰ぐ時に遇う

(貧血で痛みのある瘦軀を渡り廊下まで運ぶ)

十月二日

幾種もの介護介助があればこそ病者は癒され社会に復帰

十月十日

鏡中にブツダの瘦軀眼が光る

(想起したのはガンダーラ出土の仏陀像)

十月十三日

今日も目が覚めて、こうして生きている

明日からもしほらくは、こうして生きていくだろう

今の条件の下で、努め励んで生きていくことにしよう

十月十五日

峠から故郷の海と山々に帰還を告げて新しい日々

十月十六日

朝陽浴び山々と海に挨拶し心を清め今日を始める

十月十九日

到来の鰯に間引いた大根葉の浅漬け返す海山の郷

(良哉、朋在同郷)

十月二十一日

薄皮をはぎとるように日を過ごす修得すべしこのゆるやかな時

九月の入院翌日、娘が、『自律神経を整える写経』という本を、一日三千分に制限された面会時間に来る妻に託した。「般若心経」を三十一の句に分けて、一日に一つの句を二度なぞり、あと二度自分でも書くようにしてある。ストレスによる重度の自律神経失調が改善することを期待して、上半身を少し起こしたベッド上で、鉛筆で仰向けに書いた。二日目の注釈に「独坐大雄峰」という禅の言葉が加えられていた。まことに人間が生きていること以上の奇跡はない、この卑小な老人を省みればいっそうそう思う。しかし、頭が働かないなかでも、「般若心経」の論理に疑問が湧く。二月の手術の前と後で、この世界でこの身が遭遇する出来事が、元どおりにできないこととして起きることを、初めてのように痛切に悟ったとき、わたしのわずかな知識が何の力も持たないことを悟った。「色即是空」はカントの認識論につながるものと理解できるけれども、「般若心経」の後半に呪として説かれる「般若波羅蜜多」とのあいだには、渡しがたい隔たりのあると思う。原始仏典に現われるゴータマ・シッタールタは生前そのような超越を

しなかつたと考えられる。とにかく、「色即是空」と頭で知っただけでは、不可思議なこの世界で人間が惑乱せず動じないで生きるのに必要な力は得られない、と思ひ知らされた。わたしは、もう一度人生を経験しなおし、困難に立ち向かつて生きる身心を修得しなければならぬ。その修養のために残された時間は足りないだろうけれど。

……自宅に帰ってからも続けている「般若心経」の書写をしながら、そう考えている。

十月二十四日 見棄てられ鈴生りの柿輝くよ

十月二十七日 時あつて病者も破顔生きてみよ (孫一人に起きた幸にすぎないけど)

十月二十九日 軸に柿、床につわぶき、夕陽射す

軸に書かれた文字は「山色夕陽時」。日が西にある小山の向こうに沈むと、東の雲間には十三夜の月。山々とそれに囲まれた内海がわたしの住む小さなコスモス。その湾奥の西岸の庵でささやかな秋の一日が暮れる。

十月三十一日 夕食後岸辺に出て満月を見上げた。ひと月前の手術直後に病院で見上げた満月が、今日は、月光で海面に彼岸から此岸まで道をつくって延べる。

十一月七日

亀の歩で秋すでに去るこの道を

だが、今年の試練によって改めて人間の生きる力を修得しなければならぬことを知らされたわたしは、修行を最も重んじたゴータマ・シッタールタの説いたことを改めて聴こうとしている。偉大な人は「道はわたし一人ひとりが自ら歩まねばならないのである」と言った。たいへん困難だが、自分で模索し修行するほかに道はないのである。

凧いだ海に示された難路を前に歌や句は口をついて出てこない。

十一月八日

一か月かかって皮下出血と腫れが薄皮を剥ぐようになり引いて、手術の切開創の痛みもおおよそなくなった。皮下脂肪がほとんど消えて禪僧の言うように文字通り皮袋状態の体は、これから回復期に移るだろう。スピノザが言う身体の変容である精神も修復したいものだ。だが、身心の修復・修養には長い月日がかかるだろう。今日は友人が来て助けてくれた。

薄皮を日ごと貼り付け瘦身とその精神を改修すべし

十一月十四日

陽を頼みイバラを巡る冬の蝶

(蝶のために一輪の赤いバラ)

片隅のニュースが告げる、「今の世はわたしの生きた社会と違う」

十一月十七日

あつけなく機能回復、喜びが身に沁みわたり辛苦を癒す

人工括約筋始動成功。施術したT先生は至極当然という顔だった。

十一月十八日

去来する雲見て日がな日向ぼこ

十一月二十一日

小春日や快気を祝う膳に花

昨日は、最初の手術を受けた病院でS先生の定期検診を受けたが、あの手術から二百七十日目だった。膳は弁当、小さな花束は孫娘から。

気分が一新したら本を読めるようになった。日向ぼっこをしながら手にしていたのはA・ジイド著『モンテ・ニユ論』渡辺一夫訳。修養事始めのつもりである。今日は、林語堂著『蘇東坡』(台山究訳)で胸を打つ情景に出会った。少年の蘇軾と母が読んで学んだのは、『後漢書』列伝卷六十七、敵対者によって死刑を宣告された青年范滂とその母の感動的な会話。

伝記読む蘇軾と母に感動するこの母にしてのちの軾あり

十一月二十二日 黄菊咲く白江庵に帰り着く一から老いを生きなおす家

十一月二十四日 談論は魚市場の岸壁に腰を下ろして、コロナ禍なれば

十一月二十八日 柗の風姿にも花シテよ舞え

十一月三十日 月移り心が晴れてもう冬の今日望月を名月と見る

十二月七日 コロナ禍に下策繰り出す政府もつ国は久しく衰退途上 (齒ぎしり)

十二月八日 江海でその日暮らしやはぐれ鶉と (仙境に住まう人が来訪)

気になって調べたら鶉は俳句の季語では夏だそうなの。でも、鶉飼に使う海鶉の多くは越冬しに来るのだ。山口県の下関市豊北町大字神田の壁島は越冬地として天然記念物に指定されているという。ところが、その壁島のある豊北町神田に弥生時代の土井ヶ浜遺跡がある。遺跡から出土した女性人骨の抱いていた鳥はやはり海鶉だった可能性が高い。わたしの見ているはぐれ鶉は留鳥だろうか。俳人よ、鶉を季語の籠に閉じこめないで。

十二月九日 海光る冬の一日を胸ひとひに吸う

十二月十二日

我が家の背戸のすぐ沖で数十羽の鶺鴒がさかんに潜っていた。ここ数日、夕方に鶺鴒のいくつかの編隊が飛んで行くのに気づいたが、今日はこちらに昼食をとりに来たのだ。編隊には雁行するものもある。みな北を指して帰って行くから、ねぐらが北の海岸にあるのだろう。もちろん彼らは越冬する海鶺鴒である。前から見かけていたはぐれ鶺鴒はどうしただろう。

はぐれ鶺鴒は列組む隊に加わるかそれとも独り沈潜するか

十二月十三日

明けの明星の近くに細い月が寄り添った冬の日、洲先の小さな社で、

太鼓打つ季節の祝い大歳社

十二月十六日

陽に乗って天から降りた小雪舞う浦の苫屋の紅葉を誘い

十二月二十一日

そろそろと人の世にまた復帰して冬至を迎え今年を偲ぶ

十二月二十四日 セラピスト我が家に招き癒された感謝の食事往く年の暮れ

十二月二十六日 日の出射し我が影映す台所日の復活がヒトを動かす

暮れ参り墓の蛙の目を覚ます

墓守の蜂の一刺し年納め

蛙はシキミを活ける筒から、日本ミツバチは骨を納める室から。幸い深くは刺されなかった。藪になるのを防ぐためモチの木などの雑木を払い、山裾から侵略しつつある孟宗竹の先兵を討伐。今日はくたびれた。

十二月二十七日 赤い薔薇と水仙活けた石臼が正月飾り浦の苦屋は

かじ 門の右側には、藪椿を挿して陶製の子亀二匹を浮かべた小瓶がめ。

十二月三十日 ヒヨドリが寒波凌げと鳴き交わす

十二月三十一日 時化衝いて酔で締めた罇到来す

(内海に大波は寄せないが小雪が)

忘れえぬ年の去る夜に雪降らせ白い覆いで記憶を包め

見者としてこの世界を観想し

除日に打つ鐘のリズムで

往く年来る年を寿ぎ

小雪が舞い祝う

清らかな夜に

黙して

和せ

*

二〇二一年 正月
白江庵 謹製



友人がルグウインの書物を寄贈して
教示してくれたワーズワスの詩の一節

草原の中の輝かしい時間、花の中の盛りの時間は
いかにしても戻ってこないが、

悲しまないで、あとに残っているものの中に
力を見つけよう。

これまでもあり、これからも常にあるべき

原初の共感の中に、

人間の苦しみの中から湧きあがる

心安らげる考えの中に、

死を見通す信じる思いの中に、

哲人の精神をもたらす月日の中に。

